

## 本学競技者に関する研究 (4) —エリート競技者の心理的問題に関する分析—

阿江 美恵子 掛水 通子 雨ヶ崎 俊子

### 緒言

本学の競技スポーツ大会に参加した競技者のうち、総合国際競技大会（オリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニバーシアード大会）に参加した者の参加拡大の様子とその競技成績（世界選手権大会を含む）については平成7年度の紀要でまとめられた<sup>1)</sup>。そこでは、競技者としての表の顔が明らかになったと言ってよいであろう。

女性競技者が競技を継続することは、現在の日本ではそれほど特殊なことではなくなってきた。しかし、国際大会に日本を代表して出場するには厳しい練習が当然のことながら要求されるであろうし、そこに至る道は簡単なものでないことも事実であろう。そのような状況で競技を選択し、高い競技成績をあげそののち引退した者の研究は、競技選手の育成に役立つばかりでなく、競技選手のライフサイクルを知る上でも重要な資料を提供することになると考えられる。

では、エリート女性競技者についてどのような研究がなされているかを概観してみる。

女性競技者の競技力向上のために、日本体育協会のスポーツ科学研究委員会では、1981年から3ヶ年にわたって「女子のスポーツ適性に関する研究」が行われた<sup>13)14)15)</sup>。そこでは社会学、心理学、生理学の3つの観点からかなり多面的で大掛かりな研究がなされたが、その結果から本研究に関連する部分をまとめてみると次のようになる。

国体出場の415名の女子選手への調査の結果、平均年齢22.8歳で24歳以下の者が8割を占め、既婚者は12%しかいなかった。競技開始年齢は小学校後半

から中学校以降が多く、男子に比べると開始は遅く、引退は早い傾向が見られた。専門的なスポーツへの参加は男子に比べ他律的で、競技をやめたいと思うものも男子より多く（全体の3割）、その理由は第一は記録や体力の低下で、次が女子に特徴的な人間関係の問題や他のことをやりたいというもので、主体性、自主性が弱いと考察されている。また、競技を続けられない要因は家庭的要因、身体的要因（健康・体力など）、精神的要因（やる気など）であった。7割の選手は競技生活をよかったと考えていた<sup>6)</sup>。

スポーツのエリート女性選手たちにとってスポーツとは何かを問う「第一回国際女性スポーツ会議」が、1980年に日本で開催された。そこでは、スポーツマンとして生きるだけでなく、社会人として（女性としてではない）どう生きるか、という視点でディスカッションが展開され、「学業とスポーツを両立させる」とか、「スポーツによってよりよい職業人に、そしてよりよい妻になれた」とか、「スポーツで成功をおさめても自分は平凡な人間なので、スポーツをやめて普通の生活に戻ることに関して何の疑問も持っていない」というようなエリート競技者の様々なスポーツ観が示された<sup>5)7)</sup>。

競技者として活躍するのは長くて30代後半くらいまでであり、早い選手は高校または大学卒業と同時に競技を引退するなど、競技者の寿命は短い。エリート競技者が人生の後半をスポーツとどのようにかわったかまたはかわらなかったかは、スポーツを志すものにとって興味深いし、人間にとってスポーツとは何かを考える手がかりにもなると考えられよう。しかし、一握りの競技者についてまとめたものはみられるが<sup>2)21)</sup>、多くの競技者のスポーツ観やその後の人生についてをまとめた資料はあまり多く

はない。

また、競技選手は必ず競技を引退するときがくる。競技選手のバーナウトの研究からソーシャルサポートの重要性が指摘されるなど<sup>22)</sup>、競技不適応を起こした選手についての研究が多く進められている<sup>12)</sup>。エリート競技者と言えども競技生活を継続していた間には悩みを持ったであろうし、引退を決める心の葛藤も十分予想されるものであるが、それについてはあまり資料が見当たらなかった<sup>3)</sup>。女性競技者の競技生活からの引退が結婚問題と絡むという研究も見られ<sup>17)18)19)20)</sup>、競技生活からの引退は女性の社会的な活動という面からも興味深いものがある。

以上のような過去の研究から、本研究は本学を卒業または在学中に日本を代表して国際大会に出場するという高い競技成績をあげたもの（ほとんどは競技を引退している）を全て対象として調査を行い、エリート女性競技選手の心理的問題を明らかにすることを目的とした。

本研究は質問紙による調査法を用いたが、現役の競技者についての研究は比較的容易であるが、競技引退者を研究対象として追跡調査を行うことは、対象者の発見にかなりの時間を費やさざるをえないという問題を抱えることとなった。また、過去のことを回顧するという方法しか取り得なかったので、記憶があいまいであるという危険性も高い。したがって、そのような研究方法を採用したことが本研究の限界である。しかし、過去40年にわたるエリート競技者の心理を明らかにすることで、スポーツ競技者の心理的発達や社会心理的問題を理解する資料を得ることができると考えられる。また、とくに対象が女性競技者なので、彼らの直面する問題も明らかにすることができるのではないかと考えている。

## 方 法

### 1. 対象及び調査方法

東京女子体育大学、同短期大学の学生と卒業生で1954年から1995年までの国際競技大会（オリンピック競技大会、アジア大会、ユニバーシアード大会、世界選手権大会）に選手として参加したもののうち、

死亡者、外国在住者、住所不明者を除く180名りに調査用紙を郵送し、回答のあった117名を対象とした（回収率65%）。年齢は20歳から64歳であった。尚、対象者のうち現役学生は10名であった。

### 2. 調査期間

平成8年10月～12月

### 3. 調査内容

競技開始の動機（国際大会出場の競技）、競技開始年齢及び競技継続年数、競技生活中の心理的状況を問う5項目（怪我のこと、競技をやめたいとどのくらい思ったか、競技を続けて良かったことなど）、大学時代の勉強との両立について5項目、卒業後の競技との関わりについて4項目、さらに卒業後の職業や仕事観、社会的活動について6項目（この項目については本論では触れないが、本紀要掲載の論文参照のこと<sup>9)</sup>）を多肢及び択一強制選択法、評定尺度法、自由記述法を用いて回答させた（巻末の資料参照）。

## 結果及び考察

### 1. 回答者の競技名

本調査の対象者の競技名は以下の通りであった。  
 新体操競技 61名、陸上競技 11名、カヌー 9名、  
 体操競技 7名、トランポリン 7名、  
 フェンシング 5名、ソフトボール 3名、  
 バレーボール 3名、ハンドボール 3名、  
 スピードスケート 3名、競泳 2名、卓球 1名、  
 テニス 1名、ウェイトリフティング 1名。

合計で14種目117名であったが、テニス、ウェイトリフティングは、大学卒業後に競技を開始し、高い競技成績をあげた点が特筆される。また、先の研究でまとめられたように、年代によって競技が偏っているがここでは年代に関係なく競技ごとの人数を算出した。

## 2. 競技開始の時期及びその動機

競技を開始した年齢の平均は13.6歳であった。しかし、開始の時期は、6歳から26歳までにわたっており、大半の者が中学校期と高校期に競技を開始していた。小学校時代に競技を開始したものは18名、大学卒業後に新たに今までとは異なる競技を開始した者は5名いた。これは、競技の特性や競技人口などに関連すると考えられる。また、本学卒業年代ごとに競技開始年齢を算出してみると、昭和20年代（ $n=2$ ）15.5歳、30年代（ $n=1$ ）16歳、40年代（ $n=18$ ）14.4歳、50年代（ $n=27$ ）14.0歳、60年代（ $n=24$ ）14.1歳、平成年代（ $n=32$ ）12.9歳、現役学生（ $n=10$ ）11.1歳とわずかながら若年齢化の兆しがみてとれる（図1参照）。

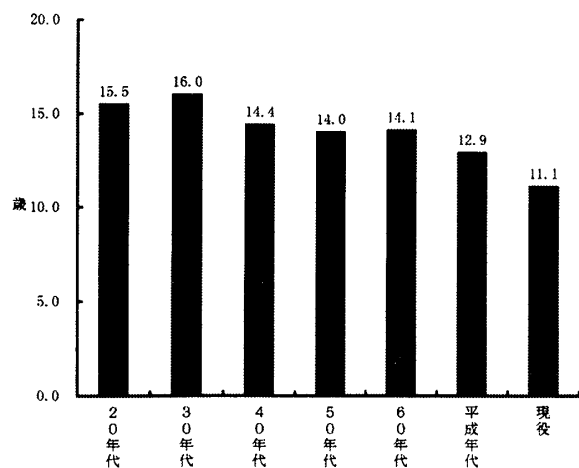


図1. 年代別の競技開始年齢

競技の継続年数の平均は、10.0年であった。しかし、これも2年から20年という幅があった。開始年齢の平均から見て、中学校から開始し、大学卒業まで継続して10年というのが最も一般的な競技継続のパターンと言えるであろう。14競技にわたっているので競技ごとの継続年数を算出したものが表1である。競泳、スピードスケート、卓球の継続年数が長いことがわかるが、競泳、スピードスケートは競技開始年齢が早いことで継続年数が長くなり、卓球は引退の時期が遅いことで継続年数が長くなっていた。しかし、人数の偏りと競技状況が様々なことも

あり、競技特性であるとは断言できない。

表1 種目別の競技継続年数

種目名	人数	継続年数の平均
器械体操	7	10.6
新体操	61	9.4
ソフトボール	3	12.0
スピードスケート	3	16.3
バレーボール	3	11.3
トランポリン	7	9.0
カヌー	9	8.3
フェンシング	5	9.4
卓球	1	15.0
陸上競技	11	10.3
硬式テニス	1	9.0
競泳	2	16.0
ウェイトリフティング	1	10.0
ハンドボール	3	12.0
全体	117	10.0

表2は、競技を開始した動機をまとめたものである。勧められて競技を始めた者が最も多く、次がおもしろそうだからという理由であった。勧めたのは多くが中学や高校の教員であり、本学の競技スポーツの人材は主として学校入学を契機として競技を開始していることがわかる。この結果は従来の研究<sup>6)</sup>とも合致するものである。

表2 競技開始の動機

動機	回答数	%
勧められた	45	38.4
おもしろそうだった	26	22.2
試合に出たかった	4	3.4
友達が始めたから	6	5.1
他の人より成績がよかった	5	4.3
有名選手に憧れた	2	1.7
その他	27	23.1
不明	2	1.7
合計	117	99.9

## 3. 競技生活中の怪我等の問題と競技生活についての評価

### ① 怪我や病気とその社会的サポート

表3は競技生活中に直るまでに1ヶ月以上かかった怪我や病気の有無をまとめたものである。半数以上の者が怪我や病気を体験しており、その体験者の

うち52.9%が怪我等を繰り返していた。高度なスポーツ技能の発揮はある意味では怪我等をする危険と隣り合わせであったり、チームの主力メンバーであれば、怪我等をしても完治する前に試合等に出場し、再発することが多くなると考えられ、二人に一人は怪我等をし、その2人に一人は怪我等を再発するという怪我等とエリート競技者の関係が指摘できよう。

表3 怪我等や病気（1ヶ月以上かかったもの）の有無

	人数	%
有り	68	58.1
無し	49	41.9

怪我等をして競技に心配を抱いたかについては、53.0%の62名が心配であったと答えた。大学卒業後に競技を引退した47名のうち2人は怪我等を理由にあげているが（図11参照）、怪我等をしても高い競技成績をあげているというのがエリート競技者であると言えそうである。

スポーツ選手の怪我等と関連して近年関心を持たれるようになった社会的なサポート<sup>22)</sup>という観点で、怪我等のときに励ましてくれて心の支えになった他者を聞いてみると図2のようであった。同性の友人、家族、指導者の順で、競技者にとっての同性の友人の役割が大きいことがわかる（本学が女子大学であることが異性の友人の割合を低くしているかは不明である）。

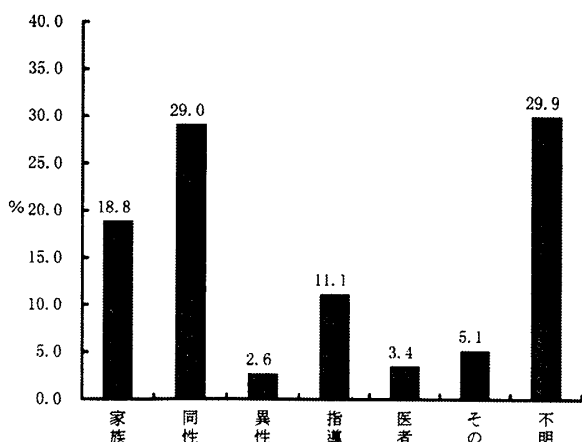


図2. 怪我等したときのサポート者

### ②競技生活についての評価

図3は競技をやめたいと思った頻度をまとめたもので、図4は「いつも」「時々」「たまに」やめたいと答えた98名（全体の83.8%）にその理由を択一選択で選ばせた結果をまとめたものである。いつもやめたいと6%（7名）が考えていたが、エリート競技者には主体性がなく責任感がないように思われる。さらに、やめたい理由が多かったものが「練習がきつい」と「人間関係が辛い」であったので、単なる現状に対する不平不満かもしれない。しかし、嘉戸の研究でも全く同様の結果が出ておりの、とくに「人間関係」は女性競技者の反応によく出現する問題である。

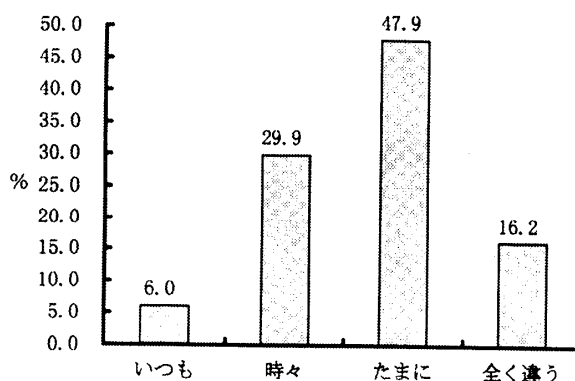


図3. 競技をやめたいと思った頻度

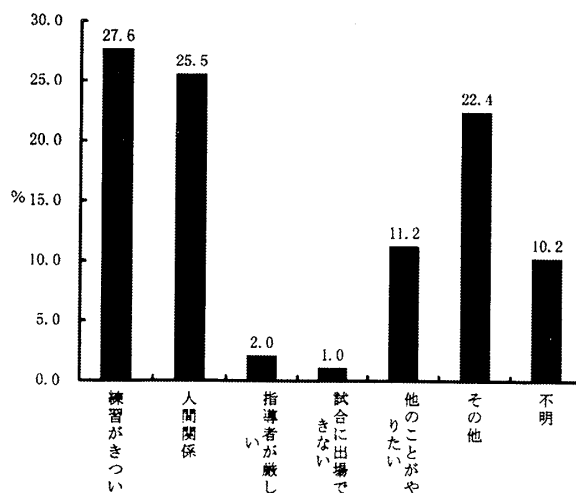


図4. 競技をやめたかった主な理由

競技を続けて良かったことを、図5にまとめた。8割以上が他の人の体験できない良い体験ができたことをあげた。一国を代表するという体験の重みを感じさせる結果であると言えよう。選択肢の内容を限定してしまったので、回答はその限定の中でしか意味づけできないが、競技成績よりも競技会等の体験に回答が集中しているのが興味深い。

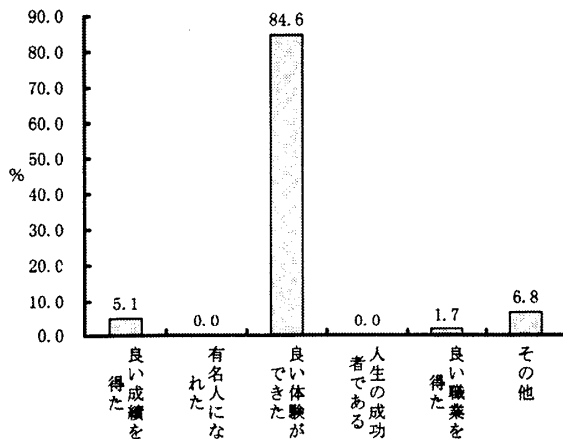


図5. 競技を続けて良かったこと

表4 娘に同一種目をさせたい程度

	人数	%
全く思わない	18.0	15.4
やや思わない	20.0	17.1
どちらともいえない	58.0	49.6
やや思う	15.0	12.8
非常に思う	5.0	4.3
不明	1	0.9

表4は自分の娘に自分が継続した種目と同じ種目をさせたいかと問うたものである。思わないものが32.5%、肯定17.1%であった。現実に子どもがいて、同一種目を選択していない場合も多いと考えられるので、否定はすぐには競技スポーツの否定にはつながらないであろうが、「自分と同じつらい思いをさせたくない」「怪我が心配」などが否定派、「共通の話題になる」「スポーツの楽しさを味わわせたい」などは肯定派、「本人次第である」「才能があれば」

などは中間派とそれぞれの自由記述で異なった意見が見られた。否定派の意見には競技選手生活の過酷な一面が示されているように思われる。

### ③競技生活中の経費について

図6は競技にかかわる経費の負担者をまとめたものである。大会参加時と通常のときにわけて回答させたが、両方とも両親が圧倒的に負担しており、まさにアマチュアスポーツ<sup>脚注1)</sup>11)であった。しかし、学校、後援会、JOCや競技団体、さらにスポンサーが大会参加時には負担することが示されており、競技スポーツへの参加が個人の方だけではなくてい様子わかる。今回は年代別の集計をしなかったが、現在に近づくほど個人以外の経費負担が増えていることが予想される。

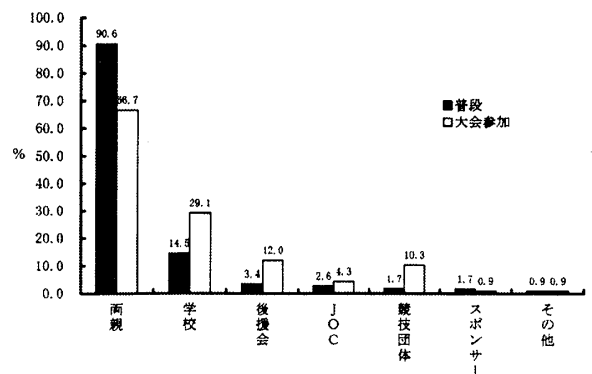


図6. 競技経費の負担者

### 4. 大学時代の競技生活と勉学の両立について

エリートスポーツ競技者が大学生である場合、一番問題になるのは要求されるスポーツトレーニングの量の多さ（試合に向けた特別な合宿なども含む）と大会参加による勉学の中断である。つまり、身体トレーニングの時間が長くて、勉強する時間がないとか、疲れて勉強まで手が回らないとか、試合のために授業を欠席しなければならないことが多いということである。ここでは、両立に悩んだのかなどを質問した。

脚注1) ここでのアマチュアとは、オリンピック憲章規則第26条の付属細則（1958年制定）の、「自らの競技能力によって政府、教育機関または企業によって資金援助された個人は、アマチュアではない」によった。尚、アマチュア規定は現在は大幅に変更されている。

表5 勉学と競技生活の両立

回答	人数	%
両立に苦勞した	65	55.6
〃 苦勞しなかった	45	38.5
不明	7	6.0
合計	117	100.1

表5は、大学時代に競技と勉学の両立に苦勞したかどうかを回答させたものである。半数以上が両立に苦勞していた。全ての教科が苦手だったとか自分の専門種目以外の実技に苦勞したなどの自由記述も見られ、大変だった様子がうかがわれた。しかし、苦勞しただけではなく、大学時代に学んだことはその後色々役立っていた。役立ったことを自由記述させてみると専門知識や部活生活で身につけたことがたくさんあった。さらに、「全てをもっと学びたかった」「指導に関すること全て」などもっと学びたかったことにも多くの内容が書かれていた。

それらを総合して、本学で学んだことへの満足度をまとめたものが図7である。「やや満足である」と「非常に満足である」が7割を越えており満足度の高いことがわかる。エリート競技者としての生活は主として大学時代であり、それが高い評価につながっていると考えられるであろう。

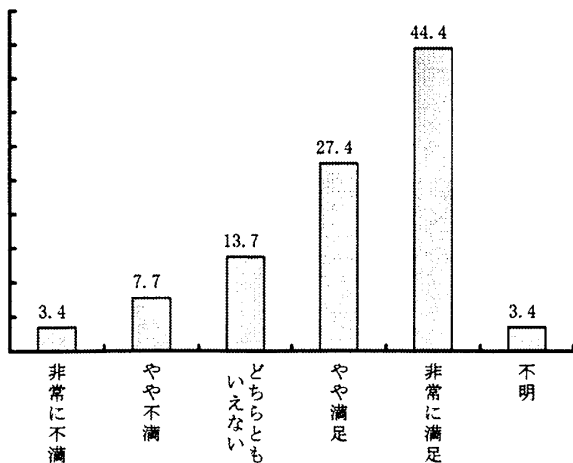


図7. 本学で学んだことの満足感

表6は、競技大会等への参加の機会の多いエリー

ト競技学生に対して勉学上の配慮をすべきであるかを競技者自身の声としてまとめたものである。現在でも特別欠課として公式競技会への参加を認めているのが本学のシステムであるが、7割のものはそれで十分と答え、2.6%の者は「特別な配慮は必要ない」と回答していた。特別扱いを要求する考えはほんの2割にしかすぎず、学生競技者として学業と勉学の両立を目指すのがエリート競技者の宿命とも言えそうである。

表6 大会参加時の勉学への配慮についての希望（複数可）

選択肢	人数	%
特別欠課で十分である	85	72.6
容易に単位取得できる配慮が必要	6	5.1
特別な補講をするべき	22	18.8
特別な配慮は必要ない	3	2.6
その他	4	3.4
不明	1	0.9

しかし、競技が高度化するにつれ、学生エリート競技者への勉学や社会生活でのサポートの必要性が高まっていることも事実である<sup>4)</sup>。現役の学生だけを対象にすれば、サポートの必要性を要求する割合が高い結果になるのではないかと予想される。日本では具体的なサポート体制はほとんど見られないが<sup>5)</sup>、今後さらに検討されるべき問題である。

### 5. 大学卒業後の競技との関わり

本学のエリート競技者が大学卒業後、競技生活を続けたかを7項目の選択肢の中から一つ選択させた結果が、図8である。競技の継続を基に分類してみると、競技継続のために就職した者（競技に関連する企業への就職と就職先とは関係なく競技を継続したものの二種類）は39.3%、競技継続のために就職しなかった者は3.4%、競技を引退した者（就職した者としない者）は40.2%、他の競技を開始した者は2.6%であった。

大学を卒業して競技生活を続けるかどうかなど競技からの引退問題は、競技者が女性である場合の方が様々な問題に直面している。チェコスロバキアの

女性競技者の競技引退の理由の研究では、人生の出来事、競技力の問題、年齢的なことが主要なものになっている。人生の出来事とは、既婚者だと妊娠や子どもに関すること、それ以外では家庭の問題や学業成績、結婚などがあげられている<sup>10)</sup>。時には本人の意志とは関係なく引退せざるをえなかったり、逆に引退できなかったりがエリート選手では起こりうる。さらに女性の場合、「女性として期待されている役割を果たせない」とか、「まわりが選手生活が長いことを期待していない」といった男性優位文化としてのスポーツ観によって、競技を引退せざるをえない状況に追い込まれやすい<sup>20)</sup>。これらを本学の競技者で見れば、競技を継続した者と引退した者がほぼ同数であった。次に継続者と引退者を分けて分析を行った。

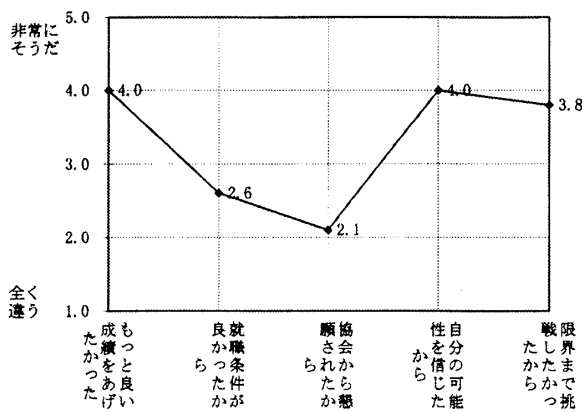
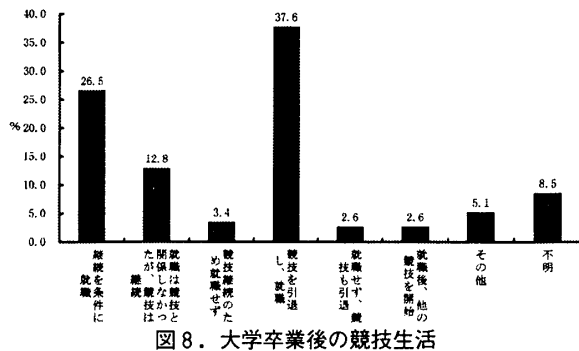


図9. 卒業後競技を継続した理由

①競技継続者について

図8の「競技を続ける条件で就職した」(31名)と「就職は競技と関係しなかったが、競技を続けた」(15名)の2項目に○をつけた46名に、大学卒業後

の競技継続の理由、競技環境などを回答させた。図9は5項目の継続理由をそれぞれ「全く違う」から「非常にそうだ」の5段階評定尺度上で評価させ、その平均点をプロットしたものである。これを見ると、「もっと良い成績をあげたかった」「自分の可能性を信じたから」「限界まで挑戦したかった」からという内発的な動機づけに基づく項目の得点が高く、「就職条件が良かった」とか「協会に懇願された」という外発的な動機によって競技を継続した者は少ないことがわかる。

表7は、職場での練習環境についてまとめたものである。「競技を続ける条件で就職した」者が三分の二含まれているのだが、指導者についての環境があまりよくないことがわかる。

表8は、卒業後に競技者としての自分を自己評価させたものである。競技力、競技成績は多くの者が向上し、半数のものが仕事を楽しいと評価したが、知識力の不足を実感したものが7割いた。大学卒業後に多くが競技力を向上させていることは、競技者としての寿命の長期化を期待する意味で、重要なデータであると言えよう。知識力については、前項の勉学へのサポートとも絡み、さらに検討する必要があると考えられる。

表7 職場での練習環境 (46名中)

項目	評価	人数	%
指導者	あり	23	50.0
	なし	23	50.0
場所	あり	40	87.0
	なし	5	10.9
	不明	1	2.2
時間	十分	28	60.9
	少ない	18	39.1
仲間	良い	38	82.6
	悪い	3	6.5
	不明	5	6.5
職種	専門職	28	60.9
	一般職	15	32.6
	不明	3	6.5
職場の理解度	十分	34	73.9
	不十分	3	6.5
	不明	9	19.6

表8 社会人競技者としての自己評価 (46名中)

項目	自己評価	人数	%
競技力	向上した	23	69.6
	低下した	13	28.3
	不明	1	2.2
仕事	苦しかった	10	21.7
	楽しかった	26	56.5
	不明	10	21.7
知識力	不足していた	33	71.7
	十分だった	10	21.7
	不明	3	6.5
競技成績	向上した	32	69.6
	低下した	12	26.1
	不明	2	4.3

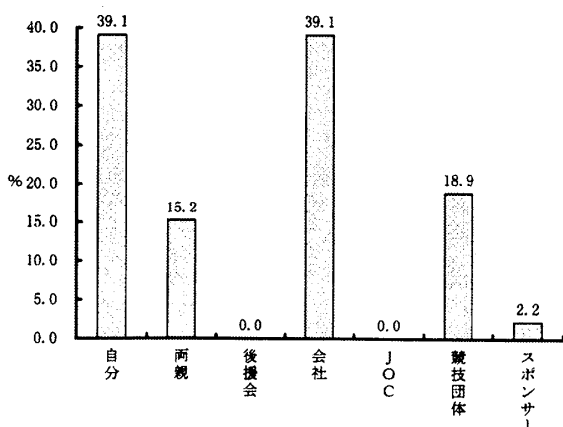


図10. 社会人での競技経費負担者

図10は、社会人競技者となってからの競技に関する経費の負担者をまとめたものである。大学時代の経費負担者(図6)に比べると本人や会社の負担が増えていることがわかるが、15.2%の者が相変わらず両親に経費を負担してもらっているのは考えさせられる。

②競技引退者について

図8で「競技は引退し、就職した」と「就職せず、競技も引退した」の2項目に○をつけた47名に競技を引退した主な原因を回答させた結果が、図11である。競技を続けたのに怪我や就職先等の関係で続けることができなかったという「消極的引退」は

10.7%にすぎず、63.8%は自ら引退を選択したと言える。大学を卒業すると競技をする環境が大きく変わるのは、学校単位で競技選手を育成している日本の現状では致し方なく、良い条件で競技が継続できる環境が競技によってないことも事実であるが(社会人の競技者への道が拓かれた競技に限られており、本学のエリート競技者の大半を占める新体操競技などは継続する条件が整っていない競技である)、競技者自身の中でも卒業を引退の契機にする様子うかがえる。したがって、競技生活の寿命を延ばすためには、競技者自身の意識と競技環境の両面の改善が必要であろう。

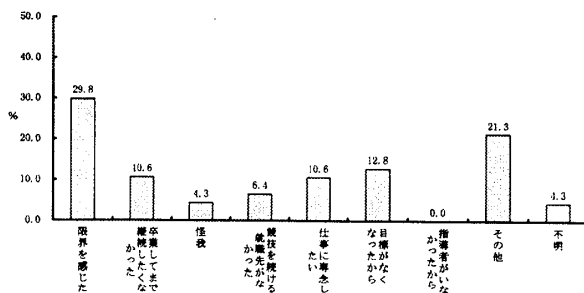


図11. 卒業後競技を引退した理由

③就職せず、競技を継続した者について

該当者は4名(3.4%)しかいなかったが、就職しない理由は3名が競技継続のためであった(1名は不明)。競技継続のための経費の負担は3名が両親で、競技団体、JOCも1名ずつ見られた。就職せずに競技を継続することについて、1名のみが不安であると答えた(不安の理由は友達に取り残されたこと)。競技はカヌー1名、新体操競技3名であった(内2名は後年本学の教員となった)。就職しなかった期間は、1年間、4ヶ月間、2年間(1名不明)と様々であった。とくに新体操競技で、卒業後に競技継続の経済的基盤となる環境が整備されていないことがここでも明らかである。

まとめ

本学の過去40年にわたる国際競技大会出場者117名を対象にした調査の結果、以下のことが明らかに



された。

1. 競技開始年齢は平均13.6歳であったが、近年若年齢化の傾向が見られた。
2. 対象者の半数以上は治癒するまでに1ヶ月以上かかる怪我や病気を体験していたが、友人に励まされたことがわかった。
3. 競技をやめたいと8割が思っていた。その主な理由は練習のつらさと人間関係であった。しかし、8割が良い体験ができたと自分の競技生活を評価していた。
4. 大学時代に勉学と競技の両立に半数以上が苦労していた。しかし、本学で学んだことには、7割以上が満足していた。
5. 大学卒業後に競技生活を継続した者としなかった者は半々くらいであった。競技を継続することを条件に就職できたのは四分の一にすぎなかった。卒業後の競技継続環境は十分ではないと考えられる。

今回の分析では、時代の変化による意識の違いは検討しなかった。年代の違いによる競技者の考え方の違いはさらに細かな分析が必要であると考えられる。

## 謝 辞

本研究にあたり、調査にご協力頂いた卒業生の皆様並びに資料整理を手伝って頂いたゼミ生の上岡慶恵さん、上村友理さん、千葉美奈さんに感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1) 雨ヶ崎俊子ら、「本学競技者に関する研究（2）—主要国際競技大会出場者とその成績（1954-95年）について—」、東京女子体育大学紀要、31:27-53,1996.
- 2) 文芸春秋編、「昭和スポーツ列伝」、文芸春秋、1992.
- 3) Butts,N.K.,et al.,” The elite athlete,” Sports medicine and health science, 1985, Pp.283.
- 4) Etzel,E.F.,et al. “Counseling college student-athletes : issues and interventions,” Fitness Information Technology: Morganton,WV, 1991.
- 5) 市川泰子、「第1回国際女性スポーツ会議 傍聴記」、体育の科学、31-1:75-78,1981.
- 6) 嘉戸脩、「女性競技者のスポーツ参加の研究 — 国体成年出場者の調査から—」、日本体育協会スポーツ科学委員会、「女子のスポーツ適性に関する研究 —第1報—」、昭和56年度日本体育協会スポーツ医科学研究報告所蔵、1982, Pp.2-32.
- 7) 加賀谷淳子、「[第1回国際女性スポーツ会議]について」、体育の科学、31-1:72-74,1981.
- 8) 掛水通子ら、「本学競技者に関する研究（1）—日本女子競技者および本学競技者の総合国際競技大会への参加拡大傾向について—」、東京女子体育大学紀要、31:8-26,1996.
- 9) 掛水通子ら、「本学競技者に関する研究（3）—主要国際競技大会出場者の社会的特性について」、東京女子体育大学紀要、32号、1997、掲載予定.
- 10) Kopecka, T.,(功刀俊夫訳)、「トップセンターからの女性スポーツ選手の早期引退の原因」、コーチング・クリニック、3-3:19-21, 1989.
- 11) マッキントッシュ, P.,寺島善一ら訳、「現代社会とスポーツ」、大修館、Pp.223,1991.
- 12) 中込四郎、「危機と人格形成」、道和書院、1993.
- 13) 日本体育協会スポーツ科学委員会、「女子のスポーツ適性に関する研究—第1報—」、昭和56年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、1982、Pp.247.
- 14) 日本体育協会スポーツ科学委員会、「女子のスポーツ適性に関する研究—第2報—」、昭和57年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、1983、Pp.166.
- 15) 日本体育協会スポーツ科学委員会、「女子のスポーツ適性に関する研究—第3報—」、昭和58年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、1984,Pp.238.

- 16) 小笠原悦子、「米国における大学生女子競技スポーツ」、トレーニング科学研究会編、「競技力向上のスポーツ科学IV」所蔵、朝倉書店、1992, pp.212-24.
- 17) 沢田和明、「一流運動競技選手のスポーツへの社会化の過程に関する基礎的研究」、滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要、No.2, 1982.
- 18) 沢田和明、「一流競技選手のスポーツへの社会化の過程に関する基礎的研究 その2」、滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要、No.3, 1983.
- 19) 沢田和明、「滋賀県研究班報告、2）女子一流運動競技選手の選手生活継続へのマイナス要因に関する研究 -第38回国民体育大会出場選手滋賀県女子選手を中心に-」、日本体育協会スポーツ医科学委員会、「女子のスポーツ適正に関する研究-第3報-」、昭和58年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告所蔵、1984, pp.147-51.
- 20) 沢田和明、「女子エリートスポーツ競技選手の結婚・引退」、学校体育、40-11:41-47, 1987.
- 21) 信濃毎日新聞社編集局、「スケート 小野沢良子札幌五輪スピード代表」、スポーツ山脈—信州あの人はいま、信濃毎日新聞社、1992, pp.302-4.
- 22) 土屋裕睦、「体育・スポーツ領域におけるソーシャル・サポート研究の現状と課題」、日本スポーツ心理学会第23回大会発表抄録集、1996, E-3.

資料

競技選手の社会的・心理的な事柄に関する調査

1. 国際大会に出場した種目(以下の質問は全てこの種目を指す)を始めた一番最初の理由は何ですか。あてはまるものを一つ選びその記号に○をつけて下さい。

- ア、勧められたので(勧めた人はだれですか?)
イ、おもしろそうだったから
ウ、試合に出たかったから
エ、友達が始めたから
オ、他の人より成績(記録)がよかったから
カ、有名選手に憧れて(誰にですか?)
キ、その他(具体的に)

2. その種目を開始したのは何歳のときですか。そして始めてから何年間続けましたか。(引退するまで。現在も続けている方は何年目を書いて下さい)。

開始した年齢( )歳
継続年数( )年間
現役・引退(どちらかに○)

3. 競技生活を続けていた間のことについてお伺い致します(選択の場合はあてはまるもの一つに○をつけて下さい)。

①怪我や病気(直るまでに1ヶ月以上かかる)をしたことがありますか。
はい・いいえ

はい と答えた方のみ以下の質問に答えて下さい

- どのような怪我(または病気)ですか( )
繰り返して怪我や病気をしましたか( )

一番ひどかったと思う怪我や病気について答えて下さい。

- 練習はどのくらい休みましたか( )
競技のことが心配になりましたか( )
一番励ましてくれた(心の支えになった)のは誰ですか(一つ○)
親や兄弟姉妹 友人(同性) 友人(異性) 指導者
お医者さん その他(具体的に)

②競技をやめたいと思ったことはどれくらいありますか(一つ○をつけて下さい)。

いつも 時々 たまに 全くない

この3つに○をつけた人だけ答えて下さい。
主な理由は何だったでしょうか。一つ○をつけて下さい。

- 練習がきつい 人間関係がつかない 指導者が厳しい
試合に出られない もっと他のことがやりたかった
その他(差し支えなかったら書いて下さい)

③学生時代に親類や大会に出場するための経費は主として誰が負担しましたか(一つ○をつけて下さい)。

- 練習(普段)のときの経費 両親・学校・後援会・JOC・競技団体・スポンサー・その他(具体的に)
大会参加のための費用 両親・学校・後援会・JOC・競技団体・スポンサー・その他(具体的に)

④ ①でa, bに○をつけた競技を続けた方のみ答えて下さい。

- ・職場の練習環境はどのようでしたか
指導者 いる・いない
練習場所 ある・ない
練習時間 十分・少ない
仲間 良い・悪い
職種 専門職・一般職・その他
・競技を続けたのはなぜですか(あてはまる番号に○を)
職場の理解度 十分・不十分
全く違う 非常にそうだ

- もっと良い成績を上げたかったから
就職条件が良かったから
協会から奨励されたから
自分の可能性を信じたから
限界まで挑戦したかったから

- ・社会人競技者としての自分を評価して下さい
競技力 向上した・低下した
仕事 否じかった・楽しかった(理由)
知識力 不足していた・十分であった
競技成績 向上した・低下した

- ・競技のための必要経費は誰が負担しましたか(一つ○を)
自分 両親 後援会 会社 JOC 競技団体
スポンサー(具体的に)

⑤ ①でcと答えた方のみ答えて下さい。

- ・何年間その状態を続けましたか( )年間
・就職しなかった理由は競技継続を優先したからですか( )
・競技のための必要経費は誰が負担しましたか(一つ○を)
自分 両親 後援会 会社 JOC 競技団体
スポンサー その他(具体的に)

・就職せずに競技を継続することへ不安はありましたか。
はい・いいえ
はいの方は理由( )

⑥ ①でd, eと答えた方のみお答え下さい。
・引退すると考えた主な理由は何ですか(一つ○を)

- ア、限界を感じたから
イ、卒業してまでもやりたくなかった
ウ、怪我で思うように動けなくなったから
エ、競技を継続できる就職先がなかったから
オ、仕事に専念したかったから
カ、学生時代に完全燃焼して、目標がなくなったから
キ、指導者がいなかったから
ク、その他(具体的に)

8. 職業について答えて下さい。
①教員免許は取得しましたか( )

- ④競技を続けて一着良かったことは何ですか(一つ○をつけて下さい)。
a. 良い成績をあげられたこと
b. 有名になれたこと
c. 他の人の体験できない良い経験ができたこと
d. 人生の成功者になれたこと
e. 良い職業につけたこと
f. その他(具体的に)

⑤自分の嫌がいたら同じ種目をさせたいと思いますか(一つ○をつけて下さい)。

全く思わない・やや思わない・どちらともいえない・やや思う・非常に思う

理由がありましたらお書き下さい。( )

4. 進学について(大学時代のこと)

①学生時代に進学との両立に苦労しましたか。 はい・いいえ
苦手な科目( ) 得意な科目( )

②学生時代に学んだことで卒業後に役に立ったことはどのようなことですか。
一般知識( )
専門知識( )
部活生活( )

③もっと勉強しておけばよかった科目とか、取得しておけばよかったという資格がありますか。自由にお書き下さい。( )

④試合で休むことも多かったと思いますが、進学との両立をどのように考えますか。

- a. 特別欠席(休むことを公に認める)を認めてもらえるだけで十分である
b. 学校の代表で出場するので、客観的に単位取得できるような配慮があつて当然だ
c. 特別な配慮などをして単位を取らせるべきである
d. 特別な配慮は必要ない(自分の責任で試合に出場しているので)
e. その他(具体的に)

⑤本学で学んだことにどれくらい満足していますか。一つ○をつけて下さい。

非常に不満・やや不満・どちらともいえない・やや満足して・非常に満足して
である ある いる

理由( )

5. 大学卒業後のことについてお伺い致します。

①卒業後の競技生活とのかかわりは次のどれですか。一つ○をつけて下さい。

- a. 競技を続ける条件で就職した
b. 就職は競技と直接関係なかったが、競技は継続した
c. 競技を継続するために、すぐに就職しなかった
d. 競技は引退し、就職した
e. 就職せず、競技も引退した
f. 就職後、他の競技を開始した(具体的な種目名)
g. その他( )

②就労状況は以下のどれですか。あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

- ア、就職は全くしていない
イ、就職し現在も継続している
ウ、就職したが、途中で退職した(その後就労せず)
エ、就職したが、その後何回か転職し(パートを含む)、現在は就労せず
オ、就職したが、その後何回か転職し(パートを含む)、現在は就労している
カ、その他( )

③最初の職業選択の時、自分の継続してきた競技をどのように変更しましたか。

- ア、競技に関連する職業に就きたかった
イ、競技を指導する職業に就きたかった
ウ、スポーツと全く関係ない職業に就きたかった
エ、その他(具体的に)

④職業についてどのように考えていますか(当てはまる方に○をつけて下さい)。

・女性と職業について
ア、結婚したら仕事はやめますか( )
イ、子どもができたなら仕事はやめますか( )

- ・仕事の内容について
ア、責任のある仕事は苦手だ( )
イ、男性と同じくらい仕事ができる( )
ウ、管理職に就きたい( )
エ、助動的な仕事が良い( )
オ、お茶出しは女性の仕事である( )
カ、男女平等は当然だ( )

7. 結婚について
結婚をしましたか( )

- はい の方だけお答え下さい
・何歳で結婚しましたか( )歳
・子どもは何人ですか( )人
・ご主人の職種は体育・スポーツ関係者ですか( )
・結婚しましたか( )

8. 社会的活動について

自分の所属してきた競技団体に活動していますか( )
はいの方は役職をお書き下さい( )

いいえの方だけ答えて下さい
活動しない理由にあてはまるもの一つ○をつけて下さい。

- ア、競技スポーツから完全に離れたから
イ、競技団体に嫌気がさしたから
ウ、家庭が忙しいうので
エ、全くスポーツと関係ない仕事をしているから
オ、もっとおいて欲しいから
カ、その他( )

以上で質問は終わります。大変長い時間ありがとうございました。ご協力に感謝致します。